

State of the Salmon International Workshop 2013 に参加して

虎尾 充

2013 年 2 月 7～8 日にアメリカオレゴン州ポートランド市で開催された State of the Salmon International Workshop「太平洋サケ属の野生魚とふ化場魚の相互作用に関するワークショップ」と 9 日に行われた MSC (Marine Stewardship Council) 認証に関する評価基準の説明会に参加する機会をいただきました。ワークショップの内容と感想について報告いたします。

ステイト・オブ・サーモン (State of the Salmon, SoS) とは、ワイルド・サーモン・センター (Wild Salmon Center, WSC) と エコトラスト (Ecotrust) という NGO が 2003 年に立ち上げた活動プログラムの名称です。SoS は、環太平洋 7 カ国の河川・外洋に至る全範囲に生息する野生太平洋サケ類の評価と保全活動を行うことを目的とし、3 つの目標を掲げています。1. 野生サケ類の生息数と多様性の改善に向けた管理を行い、生態系の健全性を維持すること。2. 健全な野生サケ資源群と生態系プロセスを維持するために、十分な生息地を保護し復興すること。3. 野生サケ類とその生態系を長期的に援護する機構、市場、人間社会を築くこと。これらの目標を達成するために、調査研究によって科学的知見を集積し、知識の共有を図るため毎年会議を開催しています。今回の会議には、日本、ロシア、カナダ、アメリカの研究者ら約 20 人が参加しました。日本からは北海道大学の埴山雅秀教授、(独) 水産総合研究センター北海道区水産研究所の森田健太郎研究員、当場の永田光博場長と卜部浩一研究主任、筆者の 5 名が参加しました。ワークショップに招待していただいたワイルド・サーモン・センターの Peter Rand 博士へのお土産に新千歳空港で木彫りのオショロコマを購入し、いざ出発！と意気込んだのですが、成田行きの便が遅れたため乗り継ぎ便に間に合わず、急遽バンクーバー経由でポートランドに入ることになりました。いきなり出鼻をくじかれた格好になりましたが、会議前日の夕方、無事ポートランド国際空港に到着しました。



写真 1 会場のマークスペンサーホテル

ワイルド・サーモン・センターがあるポートランド市は札幌市とほぼ同緯度のアメリカ西海岸オレゴン州北西部に位置し、1959 年に札幌市と姉妹都市になっています。人口は約 53 万人で、ダウンタウンは基盤の目状に整備されており、市内をコロンビア川の支流ウィラメット川という大きな川が流れています。豊平川が流れる札幌市と似たような雰囲気のある街でした。気候は札幌よりは暖かく、東京よりやや寒いくらいです。雪は全く積もっていませんでした。ポートランド滞在中は、ワークショップの会場でもあるマークスペンサーホテルに宿泊しました。

2 月 7～8 日に開催されたワークショップでは、Rand 博士からワークショップの日程や目標についての説明を受けた後、合計 11 題の研究発表が行われました。1 日目の最初のセッションは日本におけるサケとカラフトマスの迷入に関するもので、筆者、卜部研究主任、森田研究員の 3 名が発表を行いました。筆者は北海道根室管内におけるカラフトマスの迷入に関する研究事例についての報告し、卜部研究主任からは北見管内の野生シロザケと迷入に関する情報提供がなされました。森田研究員からは北海道におけるシロザケの自然再生産についての発表が行われました。ロシア、アラスカ、カナダ、北米からもそれぞれ報告があった後、ふ化場魚の迷入を管理する手法についての意見交換が行われました。北米の研究者は、どのようにふ化場魚の迷入を防いで野



写真2 研究発表の様子

生魚個体群への影響を少なくするかという立場で迷入魚を管理する手法についての議論を進めているように感じました。しかし、日本側からはシロザケ、カラフトマスともに迷入に関する調査は始まったばかりで情報が極めて限られていることから、まずは放流魚の標識率を高めて迷入に関する情報収集を優先して行う考えを説明しました。また、議長役の Rand 博士から迷入魚の動態を予測するモデルが紹介され、その有効性が強調されましたが、永田場長からは迷入には魚種、放流場所、漁業形態など地域固有の事情が影響することから必ずしもすべての地域に有効な手法という訳ではないのではないかと指摘もなされました。

ワークショップ2日目は、持続的なサケ漁業を進める上での問題点等について、参加各国からの情報提供と議論が行われました。北海道大学の帰山教授から北洋の環境収容力に基づいた持続的なサケ資源管理に関する情報提供と、永田場長からは北海道のサケ資源は後期群を主体に野生資源が残されていることが紹介され、野生魚とふ化場魚の生物学的差異の有無について遺伝子発現と生理機能の変化に着目して新たな研究を進めていることが紹介されました。引き続き、ロシア、アラスカ、カナダにおける野生資源の管理についての話題提供が行われ、それらの情報を総合して野生個体群の保全に関する課題、保全を行うために必要な方策についての議論が交わされ、ワークショップは終了しました。

2月9日には、MSC本部のHampfrey氏とRuggerone氏から、それぞれ人工増殖を行っている漁業に対して適用が予定される認証基準に関する説明と、現在

の認証基準の問題点や今後の方向性などについて説明がありました。MSC (Marine Stewardship Council, 海洋管理協議会) とは、漁業認証と水産物エコラベル制度を通じて持続可能な漁業の推進することを目的とした非営利団体です。漁業や水産会社は、MSCが指定する審査機関の審査を受け、持続可能な漁業として認められれば MSC から「海のエコラベル= MSC エコラベル」を受けることが出来る仕組みになっています。日本ではこれまでに京都府のズワイガニとアカガレイ漁業、土佐鰹水産グループのカツオ一本釣り漁業が MSC 認証を受けており、北海道のホタテガイ漁業とサケがいままさに認証審査を受けている最中です。MSC では 2014 年からの適用を目指して人工増殖を行う漁業の認証基準をより厳密にするための作業を進めているとのことでした。これに対して、現在の認証基準の曖昧さについて参加者から多くの指摘があり、Ruggerone 氏からは今後、審査基準がより具体化・明確化されるとの説明がありました。日本側からは、人工増殖の程度はそれぞれの国の人口密度や環境に密接に関連しており、そのような社会的事情を考慮する必要があること、また、これまでは野生資源の割合は問題にされてこなかったにもかかわらず最近では迷入の割合が重視されるようになり、審査基準が一貫性を欠いている点も指摘しました。今回の説明では、MSC 側の審査基準も現時点ではまだ具体化されていない印象を受けました。今後ともこの審査基準厳密化に関しては積極的な情報収集が必要です。

最終日には3日間で行われた議論に基づき、北海道における野生資源管理の在り方について Rand 博士と意見交換を行う時間を持つことが出来ました。



写真3 ワークショップでの議論の様子

サケ資源の管理の仕組みには、トップダウン式の北米やロシアと、自主的管理の日本で大きな違いがあり、北海道における漁業関係者による自主的管理の重要性とその体制構築についても説明しました。また、北米の研究者が重要視している放流魚の迷入の問題について、現在、北海道でも放流魚の標識数を増やしてふ化場魚と野生魚資源の管理に必要な情報の蓄積を進めていることを説明しました。これに対して Rand 博士からは MSC の審査機関が実態を理解するためにもワイルド・サーモン・センターから情報提供を行うとの回答を得ました。

会議終了後には、コロンビア川にあるボンネビルダムとふ化場を視察することも出来ました。この巨大ダムにはサケマス親魚が上るための階段式魚道とふ化場から放流される稚幼魚が降下するための水路が設置されており、地下で魚道を観察できるビジターセンターなども併設されていました。



写真 4 ボンネビルダム



写真 5 コロンビア川をバックに記念撮影。左からト部浩一研究主任、Peter Rand 博士、ロシア連邦漁業・海洋学研究所の Vsevolod N. Leman 博士、筆者、永田光博場長

このビジターセンターはアメリカ陸軍工兵隊が管理しているようで、かなり立派な建物でした。残念ながら今時期は、魚道を通る魚を見ることは出来ませんでした。

今回のワークショップ参加を通じて、国や地域によってサケマス増殖事業と野生魚に対する研究者の考え方に違いがあることを実感しました。今後とも調査研究とこのようなワークショップでの交流を通じて、お互いに理解を深めていくことが大切だと感じました。

(道東支場 とらおみつる)